

子どもが過ごす場所に
「創り手」がいることの
意味を探る

鮫島良一
土谷香菜子
杉浦正衛
杉浦直衛
宮里暁美
(進行)

「創る」という営み

宮里 今日ここに集まってくださった皆さんの紹介をします。はじめに、杉浦正衛さん。2016年4月に文京区立お茶の水女子大学子ども園が開園したときから、用務主事として勤務してくださっています。杉浦さんとの

出会いは本当に幸運でした。杉浦さんが実はすごい「創り手」だということがわかって、さまざまなものが創り出されていく、そんな中でこの園がガラッと変わっていくということがあったように思います。今日はちょうど弟の直衛さんもおいでになっていたのでゲストスピーカーとして加わっていただきました。土谷さんは、ポストン・チルドレンズ・ミュージアムで仕事をしていたことがあって、「創る」ということには深い思いをもっていらつしやる。鮫島先生は彫刻家であり、幼稚園の園長先生もしていらつしやいます。

今日はこのメンバーで、保育現場に「創り手」がいる、「創る」という営みがあることがどんな世界を開くのか、日頃考えていることを存分に語っていただきたいと思っております。

鮫島 僕は、彫刻の勉強をして、作家活動もしながら子どもとかかわっています。最初は

鮫島良一（鶴見大学短期大学部附属三松幼稚園園長・彫刻家）
杉浦正衛（文京区立お茶の水女子大学子ども園用務主事）
宮里暁美（文京区立お茶の水女子大学子ども園園長）

土谷香菜子（お茶の水女子大学大学院博士課程在籍）
杉浦直衛（文京区立お茶の水女子大学子ども園協力者）



▲鯨島良一氏

子どもに「創る」ことを教えよう、表現することを教えようとしていたのですが、子どもと深くかかわっていくうちに、まず

「受けとめる」ということが実はものすごく大事なんだとわかってきました。長らく、子どもたちにすごい絵を描かせてこちらが誇らしくなるみたいなことをしていた。ある時、子どもと遊んでいて、子どもがふと渡してくれた手紙がとてもすてきだった。そうやって子どもが自然にひゅっと出してくるものの中に、すてきなものがいっぱいあるなど感じたことがあったんです。その頃から考え方を改めて、教えるということはちょっとやめて、「受けとめる」ことをベースにして、「あそこでも何かやっているぞ、面白そう」って子ども

たちが思うような「創り手」として子どもたちの傍らにいたいなあと思うようになりました。

宮里 子ども園の中で、用務のおじさんでもあり、「創り手」としていろいろなものを創ってこられた杉浦正衛さんは、どんな思いで、ものを創っているのですか。

杉浦正衛 宮里園長先生から、磁石がくっつく大きめのボードが欲しいというリクエストがあり、畳1畳サイズのカラートタンを買って、ベニア板に貼り付けて、ボードを創ったことがありました。本来、既製品の磁石の付いた木のタイル等を貼って遊ぶためのものだと思っていました。子どもたちは、棒みたいなものを粘着テープでボードに貼り付けて、そこに丸いものを転がしたりしている。それを見て、磁石で付くような棒のパーツがあったらいろいろ転がせて面白いんじゃないかなと思って細い棒で創ったのが、子どもの動き



▲宮里暁美氏（ボードの前で）

を見ながらさらに創る、ということの始まりでした。その後、透明なパイプとかも貼り付けると面白いかなと考えてパーツを増やしていきました。先日子どもたちからの「くるくる回って落ちるやつ」という要望で、ボールが皿の中をくるくる回って落ちるものと、羽を回転させて落ちるものを創りました。子どもたちが遊んでいるのを見たり様子を聞いたたりしながら、こんなものがあつたら楽しいかなあと思つて、いろいろ創り足していったのです。

宮里 このボードは人気があつて、よく遊んでいます。出来上がったものを使うだけではなくて、パーツからはがれた板状の磁石をうまく使つてオリジナルなパーツを創つて遊ぶ姿も見ら

れました。子どもたちの目の付けどころは、いつも面白いです。

杉浦正衛 子どもたちが遊んでいるのを見るといろいろヒントをもらえて、いろいろ創りたくなるんです。今、「ボールがブランクみたいなものに乗つてから、落ちるやつ」という難題をもらつて、悩んでいます。（笑）

宮里 このボードがここまで汚れていることからわかるように、すごく使い込まれています。今年はこれまでに以上にすごいなあと思つて見えています。

杉浦正衛 転がすボールも、球だけではなく、楕円のものも創っています。転がり方がちよつと違つて面白くなる。

鮫島 そのちよつと不完全なところがいいんだよね。

杉浦正衛 転がして置いてボールがコースから飛び出したりするのも、子どもたちが工夫して飛び出さないようにして遊んでくれるだろ

うと考えました。

どうしたらいい
んだらうと思
ながらやって
いると、「こう
したらいんじ
ゃな



▲杉浦正衛氏

いか」と発想が
生まれますよ
ね。ちよつと
不完全なほう
が、子どもた
ちの中に研究
心が生まれま
す。

じつと見ることから

宮里 杉浦さんが何かを創っていると、子どもたちがそばに行つてじつとのぞき込んでいる姿をよく目にします。

杉浦正衛 確かに、ずっと見ている子、いますね。

宮里 杉浦さんが創っている場所がこども園の玄関前なので、迎えに来たお母さんやお父さんも見に行つたりしてますよね。創るばつ

かりじゃなくて、直しているときもある。それがまた面白いですよね。

何かを創つたり直したりしている杉浦さん
って、あんまり急いでいない。パツパツ
パツて創ってしまうのではなく、いろいろ考
えて創っている姿を見せていく。「こうす
ればいいのか」とか口にしながらやって
いるのを見ながら、工夫して創るとい
う姿勢が子どもたちにも伝播してい
くように思います。じつと見るとい
うことも大事なことだな、と気づか
されました。

ボストン・チルドレンズ・ミュージアムでの体験

宮里 土谷さんから、今取り組んでいることでもいいし、ボストンでのことでも、どうぞお話しください。

土谷 私は、お茶大の大学院を卒業してからアメリカに行き、留学の後に、ボストン・チ

ルドレンズ・ミュージアムで4年間仕事をしていたのです。そこには、0歳から3歳児のための遊び場というか展示場があつて、STEM (Science-Technology-Engineering-Art-Mathematics) に基づいた子どももの学びはいつたい何だろうということを考えていました。日本の中で乳幼児期の理系分野からのアプローチはあまりなされていないので、今、探求プロジェクトに取り組んでいるところです。

ミュージアムの中に、展示を開発して創る人たちとデザイナーたちの部門である「Develop and Production」という専門家集団があります。彼らは創り手であると同時に、何かが壊れる



▲土谷香菜子氏

とすぐに来て直してくれる。それこそ杉浦さんみたいな人がすぐ来て、直してくれるんです。既製品ではなくて、一から創り出すこと、自分の手で創ることをすごく大切にしています。

リサイクルも大切にしています。自由に使つていい廃材の部屋みたいな所もありました。プログラムの一つとして、リサイクルショップをやつて、子どもたちがリサイクルバッグを持つて、廃材を買いに行くというのもやっています。

宮里 残念ながら日本ではそういう場所は、まだなかなかないですね。

土谷 一日中、子どもが安心して、親も安心して、本当に朝から晩までそこにいられる。親も走り回ったり、何か創つたりして8時間以上過ごせる所は少ないと思つて。

幼稚園・保育園・こども園もミュージアム になれるはず

宮里 幼稚園などでも、ポストン・チルドレンズ・ミュージアムみたいな体験を提供しているようにも思うんですね。

鮫島 僕の専門の美術のほうから言うと、「オブリジェ」という考え方があって、昔は、これは何を表しているという作者の全面的な意図が行き届いたものが、一つの美術作品として価値があったんですけど、ある時代からそうじゃなくなってきた。受け取り手が自由に考えること、どういふふうに受け取ってそれを享受するかによって、そのものの意味は変わってくる。「対象との対話そのもの」に焦点が当てられたわけです。

僕が幼稚園でやってきたのは、ドーンと土を置いてそれをひっくり返してみるとか、巨大な丸太をゴロンゴロンと転がすとか。そう

いうことをしてきた。そうするとそこで土とか砂とか水とかを使って、ありとあらゆることを子どもたちが始める。土と砂と水を入れて揺すつていくと、砂だけが現れて、土は水に溶けて見えなくなるとか。学校で水溶性の勉強するのは小学校3年生くらいなんですけど、もう乳幼児のときから体験として、彼らは豊かに感じているんです。「創る」っていうことのもう一歩手前の「触れて遊ぶ世界」をとことん体験させたい。その中で子どもたちが豊かに感じているからこそ、子どもが発見して面白がっていることをちよつと手助けしたり、ちよつとだけ仕上げないでおいったりというかわりが重要になってくる。答えを最後まで決めてやらせるのではない。答えがない。そういう意味では、「オブリジェ的思考」対象（モノ）との対話」という考え方を保育現場のみんなと分かちあいたいと思っっています。子どもが息吹を込めたもの、ただのクチ

ヤクチャツとしたものだったりするんですが、それが子どもにとつてすごく特別な大事なものだだったりするんです。そういう意味では、「創る」っていうのは完成品を創る世界ではなくて、対話をしながら工夫するということを指している、そういう世界のことを言っていると思います。

宮里 変化させることができるものを手に入れたとき、子どもたちは喜びますよね。変化させられない不動のものだったら、多分、ちよつと遊んで終わりになってしまふということがあると思います。

杉浦正衛 子どもって、前に創ったものと新しいものをつなげてやっていたりとかしますね。それが面白いです。

土谷 答えを出さないと似ているのかもしれないのですが、必ず多様な遊び方ができることも大事だと思います。多様な年齢の子どもたちが来る、スペシャルニーズの子もいる

し、大人も来る。誰が来るかわからない。どんな子どももどんな大人も楽しく遊べるようなものでなければならぬ。ポストンでは、自分が主体的にかかわって変わるものであること、それから、壊れても何かしらの修正ができるようなものということをすごく大切にしていました。「直せませす」と言える自信と、子どもたちの多様な遊び方を面白がり、大人の想像を超える、子どもたちが繰り広げる遊びを楽しめる場でもあった。私たちの期待を裏切る子どもたちのダイナミックな遊び方から、次の企画、遊びをスタッフも私も考えることができました。



ランプシェード創りから

宮里 昨日、土谷さんがこども園の子どもたちとランプシェード創りをしました。

土谷 面白かったのは、途中、先生が来て白いシーツを上から吊るしてくださった、そして

たら、子どもがランプシェードを持って裏に回ってみるなど、白いシーツがあることでいろいろな動きが生まれていったんです。そのうち、春の色、秋の色、と名づけたりもしていました。ランプシェードをぐるぐるひたすら回している子がいたり……。持って動けるというところが良かったんですね。



傍らで子どもたちが「会議」と言っていて、話し合いをしていたんですけど、そこにも持つていく人もいて。明かりにはやっぱり人を集める力がある。明かりの周りにはみんなが集まってくるところが、とても印象的でした。

遊ぶじゃん創りじゃん

宮里 重なるものが見えてきたような気がします。先ほど「オブジェ」ということを言われて、触れて遊ぶ、そのことから、その辺にあるものから創り出す動きが生まれてくる。そのプロセスが大事で、「創る」というのは完成品を求めるわけじゃないということが出ていました。

鮫島 遊ぶことと創ることって、別なことと捉えられがちだけれども、すごく重なっていると思うんです。そうなのに、大人の「創る」は「遊び」のない世界だったりする。

子どもって、自分の遊びに必ず引きずり込

んで創る。創ったもので遊ぶし、遊ぶために創る。このサイクルが必ずあるのです。その典型が、創ったものを「持つ」ことだと思っ
たんです。「作品化」っていうのは、手を離すこと。向こう側に飾るとか、置くとか。遊びに
近いほど、身に引きつける。ちよつと大きくな
った子は、手で持つて過ごすことが恥ずか
しくなる。空箱で創ったものにひもを付けて
引っ張ったり、棒に蝶々を付けて、じかには
持たなくなる。ちよつとずつ距離を離してい
って、見ているだけで満足できる、作品化し
て対象として満足できるようになっていくの
です。

土谷 「持つ」ということですが、創ったもの
を「身に着ける」ということもよくある。ミ
ュージアム内のアートスタジオ (Art Studio)
という展示では、ウェアブル (wearable) と
いう言葉で表現しますが、ウェアブルアート
(wearable art) をよく創る。ドレスだった

り帽子だったりアクセサリーだったり、自分が
身に着けられるものを創るんです。アートの
スタジオは、月替わりのアーティストの作品展示
だけでなく、いつでも訪れた子どもたちがア
ートを創ることができる空間です。自分の好
きなものを創るのですが、アーティストによつ
て準備される素材が違ったり、色にこだわりが
あったり、さまざまです。地元ボストンにゆ
かりのあるアーティストが多いですが、姉妹
都市である京都や、近隣ニューヨークなどで
活躍するアーティストを呼ぶこともあります。

幼い頃はどんな生活をしていたのか？

宮里 どうして杉浦さんたちのような人がい
るんだろうと思います。杉浦家にはこういう
人が4人いらっしやる。なぜ、こういう兄弟
が育ったのでしょうか？

杉浦直衛 戦後、焼け野原の中に父親が廃材
をもらってきて建てた家で暮らしていました。



▲(左から)杉浦直衛氏・杉浦正衛氏

縁の下には廃材がたくさんあって、家の中に置いてあった工具を使って、廃材で自由にいろいろなものを創ることができたので創るとか。いつの間にか自然に何かを創っていた。それから、壊れたものを拾ってきては直してみる。そういうことをしていました。

杉浦正衛 小学校の2年か3年のとき、折り紙で何かを創る図工の時間に、その折り紙を留めている帯があつたんですね。それがとてもきれいだつたんです。その時実際に何を創ったのかはよく覚えてないんですけど、目に留まった帯を利用して、絵だったか何だったか、作品を創ったことがあります。先生が

そのことをすごく褒めてくれたんですね。他の子どもたちにも、こういう使い方もあるんだよと伝えてくれたことを、ずっと覚えているんですね。今から考えると、それが「考えて創る」ようになった原点だという感じがします。

例えば、透明なパイプの両端を固定するためにツーバイフォーの板を半円に切つたんです。切つた残りの湾曲の部分も何か使えないかなあと思つて心に留めておく。今現在はいらないものだけど、とにかく何か使えるよね、と取っておく。

鮫島 それはまさに子どものやり方だね。だから子どもと響きあうんじゃないかな。大人は部品を切つた残りはいらないけれど、子どもは虫食いの紙とか大好きで、切れ端で遊んだり、大事にしまつておいたりする。切つた残りのものでも、子どもにとってはものすごく魅力的なものだったりする。

宮里 ご兄弟でも、少しずつ性格や生活が違うのではないですか。直衛さん、創ったものことで、思い出、何かありますか？

杉浦直衛 壊れたテレビからスピーカーを外して、みかん箱に直径16センチくらいの穴をカッターで開けて、そこにスピーカーを収めてラジオの出力端子につないで音が出るようにしたりしていました。学校の学園祭だったかな、何かお店みたいなのをやったときに音楽が必要になったので、家からそれを持って行って、パツパツパツと組み立てて音を出したことがあります。そんなことしよっちゅうやっていったから、自分にとっては何でもないことだったのですが、みかん箱からなんで音が出てくるのかと驚かれました。そういうことが好きで、繰り返しやっていました。

宮里 学校の授業でというのではなくて、家でそういうことをやるのが当たり前だったのですね。

杉浦直衛 テレビの映りが悪くなると、テレビの修理屋さんを呼んで、その修理屋さんどこを開いてやるのかをのぞき込んでいた。そういう、何かやっているところを見たりまねしたりということが原点にあるかもしれないね。お金がないから買えないので、何でも自分で創ってみようとしていました。

建築現場に行くと、いまだに大工さんや左官屋さんの技に、つい見入ってしまいます。今はあのような工具でやるのかとか、どことどこを釘で合わせて創るのかとか。自分の趣味の延長線ですけど。そんなことを見たり、まねしたり、自分でやったりするのが好きですね。



ものを生み出していく原動力

宮里 先ほどの、子どもたちが杉浦正衛さんのやっっていることをじっと見るとい話ともつながるところですね。今までの話に追加で何かありませんか。

鮫島 僕は、やっぱり子どもの世界と大人の世界には違いがあると思う。大人は「これはこういうものだ」とわかったつもりにならないうと生きていけないところがある。ところが、子どもの世界というのは、「これって何だろう?」の世界。いつもみずみずしい感覚がある。だからこそ、それがモノを生み出したりする原動力になっていくんだと思うのです。「創る」っていうと、何か技術を要するものだと考えられがちだけど、技術だけじゃなくって、「これって何だ?」が一番重要。子どもたちが工夫したりする世界と、杉浦さんのような創り手の工夫するものが呼応している

というか、共鳴しているというか、これがすべきだなあと思えます。

宮里 「これって何だろう」の世界が、ものを生み出すってことですね。

子どもたちのそばで創るって

宮里 ところで、子どもたちのそばで創っているということは、何か良いことがありますか?

杉浦正衛 自分が創ったもので遊んでくれているというのが、何といつてもうれしいですね。どんなふうになんでいるのか、どんなふうに使ってくれているのか、とても気になります。一つの決まったものだったらその遊びしかないんですけれども、





いろいろな組み合わせて遊べるものは、やっぱり面白い。子どもたちが毎日遊んでいるのを見る限りにおいては、プラスチックのブロックが一番人気。ブロックでいろいろなものを創って飽きずにやっていますね。自分で想像して創るっていうのが一番楽しいんだという感じがします。創ったものを「見て見て」って、よく言ってきます。

宮里 今日、こども園ではデイキャンプがありました。直衛さんにも手伝っていただきました。子どもたちとかかわるのは久しぶりだったのではないですか。子どもたちがごちやごちやいる場所はどうですか？

杉浦直衛 久しぶりに子どもたちに話しかけられたりして、ちょっとうれしかったです。子どもたちがガヤガヤ

来ると、どうしようと思うときもありますが、今日は楽しかったです。

宮里 子どもの中にいながら「モノを創る」というのは、どんな感じですか？

杉浦直衛 やっぱ反応かしらねえ。びっくりしてくれる。うっとうしいぐらい「どうして？」「なんで？」の連続。小さい子どもが喜んでくれるというか、反応してくれるっていうことがうれしくて。僕もついつい手伝いたくなるのです。

宮里 これからの社会を考えると、子どもたちがいる所に大人がどんどん出ていって、一緒にいろいろ創ったりすることを大事にしたい。何かが創られている場が開かれています。子どもたちがそれを見に行くことができることで、双方にとって良い作用があるような気がします。

感動が探求の原始体験

土谷 「これって何だろう?」「じーっと見て
いる」という話が先ほどありました。例えば、
光をなんて美しいんだらうって、0歳でも吸
い込まれるような顔をするじゃないですか。
自然の中で強い風が吹いていて、その風はい
ったい何だろうとか、気持ちいい風が吹いて
いるとか、レモンのいい匂いがするとか。人
間の原始的な感覚というのが、子どもたちの
生きる力になるんだと思うんです。STEAM
では、観察力と言っていることです。ひと
言で言うのと薄っぺらなものに聞こえちゃうん
ですけど。見ていることって何もしていない
んじゃないかって思われがちですけども、
そうじゃなくて、そのことに吸い込まれてい
く感覚とか、面白がっているところが、科学
の始まりなのです。

昨年、経済産業省の「未来の教室」として

採択されたお茶大こども園ラボで製作をした
フライングラボ（扇風機のような送風機によ
って、アクリルの透明な筒の内側を空気が上
昇する装置）でも、手を離れた瞬間にスカ
フが風に飛ばされて飛んでいく。もう二度と
同じ風は吹かない。1回しかないところに、
はかなさを感じたり、美しさを感じたりして
感動するのが、探求の原始体験になると思
うのです。きっと大人も共感できるところがた
くさんあって、そんなふうな経験を、大人も
子どももたくさんしていけたら、それをどう
やって創っていったらいいんだろうとか、ど
うやって表現したらいいんだろうとか、その
疑問が満たされることがやりたくなる。その
過程でもっともつと不思議に思えるってい
うのもあるのかな。風力も、小学校2年生くら
いのカリキュラムになるのですけれど、こ
んなに幼稚園とか保育園で豊かな経験をし
るのにもかかわらず、教科になった瞬間に感

動の部分が欠落していつてしまっんです。

鮫島 味気なくなってしまう。

土谷 乳幼児期の感動がその後欠落しないようにしていかねばいけないのかなあと思っています。

宮里 この座談会をしたかったのは、「創り手」が子どもたちの身近にいることで、こんな生活が魅力的になるし、子どもたちが変わっていくのだということ、そのことをじっくり考えたいということが動機でした。たくさん語っていただいて、ありがとうございました。

(2019年10月26日)

文京区立お茶の水女子大学こども園にて)

